

創立125周年記念行事

多摩キャンパスに蘇る湧水池 環境再生し、生態系の復元図る

緑溢れる多摩丘陵に抱かれた中央
大学多摩キャンパス。豊かな生物多

様性に欠かせない水質の良い湧水が、
キャンパス内に何箇所も見られるが、
そのなから、かつてあった湧水池
が蘇ろうとしている。

昨年夏に実行委を結成

湧水池の「復元」に取り組んでい
るのは、経済学部の「湧水を中心と
した多摩キャンパスの生態系保全と
ビオトープの確立」実行委員会で、
創立125周年記念行事として昨年
に立ち上げられ、秋頃から活動を始
めた。キャンパス内の自然の湧水に
着目し、ビオトープとして保全・再
生することで、生態系の復元を図る



湧き水でできた小さな池

うという「多摩キャンパス内の環境
再生」が目的だ。

実行委員長の黒須詩子・経済学部
教授は「生物多様性を維持すること

は、私たちの存亡に
関わっています」と
企画の重要性を強調
する。

「人間の経済活動
は生物多様性による
恩恵、すなわち『生
態系サービス』に支
えられています。そ
して、生物多様性を
支えるのは『水』で
す。キャンパス内に
潜在的に存在する湧
水を活かすことで得
られる経済効果は絶

大なものと考えています」

水資源が豊富な多摩丘陵

一般的に、湧水は高低差のある丘
陵地に豊富に存在し、雨水が山にし
みこみ、ゆっくりと浸透していくこ
とで水はる過され、美しく非常に冷
たい水として地上にあふれ出てくる。

かつて多摩丘陵一帯は水資源が豊
富で、生活用水や灌漑農業に利用さ
れていた。そんな丘陵地を切り崩し
て中央大学多摩キャンパスは建設さ
れたが、校舎完成後も湧き水は出続
けた。その湧水や山から流れ来る水
が集積し、多摩キャンパスの北門近
くには直径4〜5mの湿地帯が存在
し、カエルなどの両生類が繁殖し、
30種を超える野鳥が毎年、飛来して
いたという。

しかし、1980年代前半に、大
学の下に水が流れ込んでしまってい
るという理由で、湿地帯にできた池
は埋め立てられてしまった。それに
より、おたまじやくしなど水辺の生



桜広場の一角にできる湧水を指差す黒須教授

き物は激減し、飛来していた野鳥はいつの間にかいなくなってしまう。だが、水質が悪くなったわけではない。キャンパス内の何箇所かでは今も非常に水質のよい湧き水が見ら

れ、その周辺では絶滅が危惧されている生き物や植物が細々と生きてい。 「身近な自然に関心をもち、生物多様性を守って行くことは、私たちの利益につながるのです」と黒須教

授は訴える。

直径3mの湧水池が2か所

黒須教授ら実行委員会が候補地にいる湧水池は、桜広場の奥の一角と、サッカー場に隣接したテニスコート脇上方にある林の中の二箇所。



サッカー場とテニスコート脇の湧水池候補地

それぞれ直径3m、深さ30〜50cmほどを予定し、計画では年内完成を目指している。

「池は深くする必要はなく、むしろ深いと魚などの両生類の天敵が入り込む」という。また、多くの人が常に関心を持たないと、忘れ去られ、落ち葉ですぐに池が埋まってしまう。な

お、テニスコート脇上方は危険な場所にあるため一般公開はしない。実行委員会は、この活動の一環として『多摩丘陵の自然保護、これまでとこれからの展望』をテーマに3回にわたって連続シンポジウムを開催。それぞれ多摩丘陵の自然保護に関わり続けた人が講師として講演を行った。

(学生記者 中野由優 季Ⅱ法学部1年)